二〇二五年度　成城大学大学院　文学研究科Ⅰ期　入学試験問題

国文学専攻　博士課程前期

《国文学・国語学・漢文学》

注意事項

一、問題はA・Bの二種類からなる。両方とも解答すること。

一、Aの問題では、七分野（上代文学・中古文学・中世文学・近世文学・近代文学・国語学・漢文学）から三分野を選び、さらにその中のイ・ロいずれかを選んで解答すること。ただし、受験者の専門分野の問題は必ず解答しなければならない。

一、Aの解答用紙（表と裏とあり）で、選択しなかった分野の解答欄には、大きく斜線を引いてそれを明示すること。

一、Bの問題では、解答用紙の「選択した分野」の欄に、自分の専門分野を明記すること。（例、「B・近代文学」）。

一、以上、二枚の解答用紙それぞれに、受験番号を忘れずに記入し、たとえ白紙であっても必ず提出すること。

以上

A

次の七分野の問題から、三分野を選んで解答すること。ただし、受験者の専門分野の問題は必ず解答しなければならない。なお、各分野から選択した問題の記号を所定の欄に記入し（例、「中古文学イ」）、選択しなかった分野の解答欄には、大きく斜線を引いてそれを明示すること。

A・上代文学

次のいずれか一つを選んで、十行以内で説明せよ。

イ　額田王について

ロ　『古事記』について

A・中古文学

次のいずれか一つを選んで、十行以内で説明せよ。

イ　古今和歌集について

ロ　仮名文字について

A・中世文学

次のいずれか一つを選んで、十行以内で説明せよ。

イ　『太平記』について

ロ　吉田兼好について

A・近世文学

次のいずれか一つを選んで、十行以内で説明せよ。

イ　仮名草子について

ロ　近世文学史における川柳の位置について

A・近代文学

次のいずれか一つを選んで、十行以内で説明せよ。

イ　斎藤緑雨について

ロ　「観画談」について

A・国語学

次のいずれか一つを選んで、十行以内で説明せよ。

イ　アクセントについて

ロ　接続詞について

A・漢文学

次のいずれか一つを選んで、十行以内で説明せよ。

イ　対句について

ロ　『史記』について

B・近代文学

次の文章を読んで、以下の問に答えなさい。

拈華微笑[1]

上

[2]不説説。不聞聞。口よりも眼はよく言ひ、耳よりも聞くこと聡し。市ケ谷御門外の御濠に、鴨の羽音朝の霜に冴えて、松の梢は静なれど、身を斬る風吹さらしの大路を往来の土方ども、あいつをしめて、きうと熱いのをと、交番所の前をつぶやいて過ぐる後より、二十五六の判[3]任づくりの男、手頭をポツケットの底に暖め、両臂をくの字形にして、腋の下に弁当包を挾み、何省へ勤むるか知らねど、南の方から来て、御門を入り左へ曲りて行きけり。降らでかなはぬものならば、雨もふれ、雪もふれ、難義らしき顔もせず、いつが日にも休むことなく、しかも徒行なり。客待の車夫も此人は別物にして声を懸けず。[4]いかな朝も見えぬことなければ、[5]烏官員と嘯きちらし、帽子と外套の黒色までが、笑の種となりけり。それにしても此男は小白く、眼にいはれぬ可愛き処ありて、近来のばせし八字髭の形もよく、これで身のまはりさへよくば、車夫づれにとやかういはるゝ人品ならねど、世の中は銭が大明神！

今年の二月以来、毎朝同じ時刻――同じ場所にて行遇ふ車上の美人あり。召物の[6]うつついは此が学校衣かと驚かれ、ぽつとりと万事が上品粧。いつにも日本風の髪を結はれしことなく、[7]鬢髢引つめて、ぐるりと左巻の無雑作結。薄紅の一輪花の簪に、[8]琥珀色の[9]束髪櫛。或時は洒落て舞踏結、[10]侠なれど気が替りて此もよし。肌理濃に地色の白きが上に、薄り刷かれしは可厭にあらず。[12]地蔵眉柔和にして眼元情らしく、左の眼下に一粒目立つ黒子のあるは、大いなる愛嬌になりて瑕ならず。車の走るに少し反身の姿はにくいほどよし。

此男偏屈にて同僚の交際を知らねば、誉むる人なく、第一馬鹿律義にて[13]いつこくにて、無口にて、ぼんやりにて、雪を画けとあれば六角に画き、花を詠めよといへばまじ〳〵見つめるほどの人物。女の噂が出れば、むかふ向になつて書見とは、若いものがあゝでも困る、世情に疎きもとれゆゑといはるゝ男が、撩違ひ――電光石火の姿に、何の目留る理はなく、留つてからが、なるほど美しいと見ても、其美しきが何でもなく、其美しきをどうといふ気はなほなし。天の配剤妙なり、恋なり。美しきあれば醜きあり。今のは美の部に生れ合せとばかり、手軽に思ひ消してあとには何も残らず。いはゞ肉眼に光線の作用ありしばかりにして。物は幾度も見るにつけ、眼光次第に骨随にいれば、其味自ら知れて、初はさも思はざりし物まで、其々其物の妙にありつけば、花は桜のみかは、海は須磨にも限らざるべし。まして美しきを見て、勿体なくも美しと思はぬは、食はず嫌ひの妙処を暁りえせずして、女などは好かぬと言ひちぎり、人に悪くいはれし例なきを一つの頼みにして、嫌ひですましておけど、道理に二つはなし、これが学問ともいふならば、進まぬながらも大好物といふべし。好色、不徳はよかるまじけれど、男として眉目麗しき女を見ながら、顔を顰むるなどは、偽聖人か、但しは食はず嫌ひか。偽聖人は[14]済度の沙汰に及ばず。食はず嫌ひだけは、いかにも慈悲を垂れて成仏させたきものなり。

我から好んで見るにはあらねど、同じ時刻同じ場所に同じ現象。彼方は車上、此方は徒歩、もとより一呼吸の見る口ながら、其も続けば自然眼につき、また今朝も……いつも遇ふ女、何処へ行くのやらと、何気なく見過すに日数つもれば、まます〳〵目馴るゝにつけ、神以て恋にあらねど、此顔懐しくなり、其姿見ぬ朝は物足らぬやうに覚ゆるに、女も思はかはらず、男に睨まるゝはいやな物にて、顔を背くるか、傘を傾くるか、娘気の一寸陰をすべきに、其をせず、我からも見るまでに知合ひぬ。半町距てゝも其車は目に入り、かの人と歩行風を見知り、やがて近処り擦違ふ時、彼此見合ふのみにて二月ばかりが間は、別の所作もなかりしが、いよ〳〵見知になれば、何時も希有な顔を合すもどうやら艶なく、また遇ひ悪くもなりしが、ある朝女よりまづ微笑をくれしに釣出されて、男も笑みかへせしより、例になりて、其後は微笑が挨拶となり、偏屈者も此は万更わるい気もせぬかして、行遇ふ時笑み、二三歩して濠をむいて独りまた笑みし事あり、此心中知り難し。

日曜の待詫しきは、自他ともにかはることなし。偏屈なりとも、六日勤めて一日の休業は、此日一刻千金、寸陰今日を惜みて余りあり。なるほど今まではさもありしに、此日頃は、存外日曜も嬉しからず。思へば人間得手勝手にして、彼の笑顔

を見られねば、余所にて長かれと祈る大事の日を、つまらなく一間に籠り、早く暮れよと待明し、今日出勤の時刻平常とかはらぬに、悲しや見られねば、失望に気を腐らし、其翌日はまた今日もかと、思の外なる首尾にて、嬉しや、無事なるお顔を見たり。

此次の月曜も見えられぬに少し不審を立てしが、其かと思ひつく事ありて其次を試みしに、果して前の此日に変らず。扨は休日なりけり。今まで斯る事はなかりしゆゑ、あつたら苦労をしたり。我する苦労ならばいかほどでもあれかし、まづ其人の身に恙なきこそ幸ひなれ。

此秋の神嘗の祭日、所用ありて（山下）を行きしに、鹿鳴館に奏楽聞え、鉄柵よりのぞけば、木陰に馬車人力車群集し、何ぞ催しありて今を最中と覚しき時刻なるに、門に懸る時、車一台駆出し、車上の貴婦人は其人なり。此は変つた所で遇ひたり。互の不意に例の笑顔はなく、如何なるはずみか、馬手跳つて帽子に懸り、男が頭を下げて挨拶すれば、女はし後れしを詫ぶる思入にて、殷懃に会釈ありて其儘別れぬ。遇ふに定れる処にて、最初時宜しそゝくれては、中途から改るは異な物なれど、かうした思懸けぬ時には、かねての知己といふ気になり、調子よく挨拶も為得るものなり。此次の日からは、此迄の笑顔に稽首加はれば、大分親密の度も増し、人目には嘘や格別の交際と見ゆべし。思へば我らしきの分際にて、かゝる高貴のしかも美しき婦人と挨拶する事、過分の名誉といふべし。この人の車走らす時は、過ぐる人は振返り、来懸るものは見迎ひ、誰が目も遁さぬ容色なれば、彼の人の馴々しく時宜するはどんな奴かと、其顔を見しものゝ、また我顔を見ぬはなきに、此年齢にていふもをかしけれど、羞かしくなりて遁ぐる如く早足にすれど、また思ひかへせば、われ尊からずしてかく尊き知己あるは、何にしても肩身は広し。さりながら、彼の人は心憂く思はるべし。なる事ならば先方の恥辱にもならぬやうにと、此が一つ、二つには其人の手前少しは繕ひたく、まづクラワツトも新形を好み、此冬の移替を機に、品はともかくもパンタルウンを細くするなど、しをらしき心遣ひを覚え、今更色気づきしかとの陰言はありながら、あれほどの偏屈これほどに和ぐも恋でこそあれ。良薬、毒薬、用法一つ。裏から見れば雑巾もかはることなし。

此心づかひ自ら先方へも通じて、今迄はさもなかりしに、此頃女は三日にあげず、羽織――小袖、取替へ、引替へ、何を着てもうつらぬはなく、なほ寝覚間のなきお出懸なるべきに、鬢の毛一筋乱さず、顔の化粧行届きたるに、生やさしからぬ思の籠れるも知れて、嬉しさ身に染み、此分では万更馥の貝ではあるまじとはずみかけ、到底出来ぬ事なるべけれど、其処が縁にてどうぞなるものならば、是非この人をといふ一念目色にあらはれ、昨日に増して心を籠めたる微笑をつくれば、女も意味ありげなる笑顔を見するにいよ〳〵のぼせ、なほ其心を試すべき工夫を案ずれど、これといふ思つきなく、二三週は夢のやうに過ぎけり。

大雨夜を籠めて朝にやまず。傘は二重張なるに、面に霧を吹きかけ、袖も背もしぶきに濡れわたる往来の人を見て、母は乗れといへど車は栄耀と、古外套の借からぬを引かけ、戸棚に棄てし古帽子を、禍も三年たてばと打冠りて出でしが、此雨ゆゑ彼の人は休なるべし。よし休まずとも母衣深ければ、中秋無月、不愉快！　元気薄くして道はかどらず。いつも此処らは車の見える辺と、見るに見えず。車は大分見ゆれど其らしきはなし。もしや見過せしか、我思ふほどにもあらば、母衣の中よりのぞく位の実意はあるべきにと、一町余ゆくに一つ車に出遇ひたり。此雨に母衣もかけず。不思議と見れば、その車夫！　其人！　車の上なは。今朝はいつよりにこやかに、会釈も丁寧に、此雨に定めて御難義なと、慰めたき風情たしかに見えたり。車には母衣のあるものを、かはつた物好と立留つて見返れば、五六間ゆくと車の中より、燃立つ色の襦袢の袖口にからまる手をさしのべ、母衣をふわとかけて車は急ぎぬ。扨は真実我に劣らず、我顔見んとてしよぼ濡れたまふか。さほどの心中とは知らず、我愧かしき此扮装、客嵩男などゝ愛想つかされなばと悔みしが、次の日少しもかはる事なかりし。

（下は略）

2.

注

(1)拈華微笑—(仏教語)心から心に伝えること。霊鷲山で釈尊が華を拈って見ながら説法したのに対し、摩訶迦葉だけがその意を悟って微笑したという故事。

(2)不説説不聞聞—(仏教語)説明せずとも理解され、聞かなくてもその意の通じること。

(3)判任—判任官のこと。明治憲法下、官吏の最下級。奏任官の次位で本属長官がその任免を専行した。

(4)いかな—どのような。どんな。

(5)烏官員—人家近くに住み巣に出入する烏から軽蔑した表現。

(6)うっつい—(ウツクシイの転)美しさ。かわいさ。

(7)鬢髪—ビンは頭の左右側面の髪。タボは日本髪の後方に張り出た部分。

(8)琥珀色—樹脂などより生じた一種の化石。黄色を帯び脂肪光沢あり、透明ないし半透明の美しい色。

(9)束髪襟—明治一八年頃から流行した髪型(二百三高地など)に用いた襟。

(10)舞踏結—バレリーナ風の髪型。

(11)侠—勇みはだでいきなこと。

(12)地蔵眉—根元太く、末細くわん曲した長い眉のこと。

(13)いっこく—頑固なこと。

(14)済度の沙汰—済度(仏教語)は衆生を済い出して彼岸に度らせること。煩悶を除き悟らせる試み。

(15)あったら—あたらの促音。おしくも、もったいないことに。

(16)神嘗—かんなめの祭。天皇が新穀を伊勢神宮に奉る祭。一〇月一七日。

(17)時宜—時の丁度よいこと。時候などの挨拶。

(18)稽首—首が地につくまでの礼。ここでは挨拶の礼。

(19)我らしき—われわれふぜい。

(20)クラワット—cravat(英)ネクタイ。蝶ネクタイ。

(21)パンタルウン—pantallon(英)ズボン。

(22)馥の貝—あわびの片思いにかけている。

(23)栄耀と—(エイヨウの約)はなやかにおごること。ぜいたくにもの意。

(24)母衣—風・雨・光を防ぐ人力車のおおい。

(25)吝嗇—けち。過度のものおしみ。

問一、作者名を答えなさい。

問二、右の文章を自由に論評しなさい。